

学童における鼻アレルギーの調査研究(第2報)

—昭和60年度白峰地区学童の耳鼻咽喉科検診成績より—

富山県農村医学研究会 豊田 文一
 金沢大学医療技術短期大学部 津田 光世
 川島 和代
 金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室 宮崎 為夫

はじめに

著者の一人豊田は、農協高岡病院に在任中昭和33年より40年まで8年間、新湊市学童の耳鼻咽喉科検診を担当し、さらに中新川郡上市町の児童生徒の検診を昭和44年より13年間続行し、その遂年の経過について本誌に発表した。さらに昭和55年より石川県白峰地区の小中学校児童生徒の耳鼻咽喉科検診を依頼され実施に当たっている。

この白峰地区は白山山麓の手取川溪谷に散在する過疎地帯で、とくに最近花粉症の増加がマスコミを通じて喧伝され、とくにこの地区は林業を主産業とし、古くより白山杉と称せられ良質の木材を産出していた。従って溪谷をはさむ山梁は杉の密林で、開花時には花粉の飛散も濃厚で、それによる花粉症の発症も想像に難くない。従って私どもは、鼻アレルギーに検索の重点をおき、調査研究を行った。

今回、昭和60年度の検診成績に基づいて検討を加えたいと思う。

検診成績

対象は、該地区の全小学校中学校の児童生徒で、学校数は小学校、中学校各5校で、第1表、第2表に示す。

その耳鼻咽喉科疾患の罹患状況については第3表(小学校)、第4表(中学校)に示す。

耳鼻咽喉科罹患率は、小学校では昭和59年

第1表 検診対象(小学校)

学校	学年						計
	1	2	3	4	5	6	
河内小学校	9	16	9	9	12	17	72
鳥越小学校	32	33	38	42	49	48	242
吉野谷小学校	18	15	18	21	20	21	113
尾口小学校	13	11	7	22	13	10	76
白峰小学校	15	11	17	13	15	16	87
計	87	86	89	107	109	112	590

第2表 検診対象(中学校)

学校	学年			計
	1	2	3	
河内中学校	15	19	12	46
鳥越中学校	44	49	40	133
吉野谷中学校	13	17	25	55
尾口中学校	14	9	22	45
白峰中学校	11	22	14	47
計	97	116	113	326

19.0%で60年度18.0%でほとんど変わらない。

中学校においては昭和59年度11.4%が60年度6.4%と著しい低下をみせている。

また重点的に観察している鼻腔の炎症性疾患(鼻炎、副鼻腔炎、鼻アレルギー)は小学校においては8.1%で59年度は12.0%で減少している。また中学校では6.3%、59年度7.2%で僅かに減少している。さらに単純な鼻副鼻腔炎のうちにアレルギー性も否定できず、分泌液の好酸球の検出を行ない、このため前年同様エオジノステン(トリキ)を用い鏡

第3表 耳鼻咽喉科疾患罹患状況(小学校)

学 校	学年	疾患名										学 童 数
		鼻 炎	鼻 た け	慢 性 副 鼻 腔 炎	扁 桃 肥 大	扁 桃 炎	ア デ ノ イ ド	ア レ ル ギ ー 性 鼻 炎	咽 頭 炎	そ の 他	罹 患 者 数	
河 内	1	1		2	2						5	9
	2	1			2			1			4	16
	3				1						1	9
	4	3									3	9
	5										0	12
	6				2			1			3	17
	計	5		2	7			2			16	72
%	6.9		2.8	9.7			2.8			22.2		
鳥 越	1	3		2	2				1	8	32	
	2	2		2	2		4			10	33	
	3			1	2		1			4	38	
	4	1			4		1			6	42	
	5	2					1		1	4	49	
	6	1		2	2				1	6	48	
	計	9		7	12		7		3	38	242	
%	3.7		2.9	5.0		2.9		1.2	15.7			
吉 野 谷	1	1			3	1	1		1	7	18	
	2	1								1	15	
	3						2			2	18	
	4	2				1	2			5	21	
	5	2		2			1		1	6	20	
	6									0	21	
	計	6		5	1	2	5		2	21	113	
%	5.3		4.4	0.9	1.8	4.4		1.8	18.6			
尾 口	1	1			2		1			4	13	
	2	1		1	1					3	11	
	3									0	7	
	4	4					1			5	22	
	5	1								1	13	
	6									0	10	
	計	7		1	3		2			13	76	
%	9.2		1.3	3.9		2.6			17.0			
白 峰	1				1					2	15	
	2	1			1					2	11	
	3	4		1					1	6	17	
	4				1					1	13	
	5	2		1	1					4	15	
	6	1			1		2			4	16	
	計	8		2	5		3		1	19	87	
%	9.1		2.3	5.7		3.4		1.1	21.6			
合 計	35	0	12	32	1	2	19	0	6	107	590	
計 %	5.9	0	2.0	5.4	0.2	0.3	3.2	0	1.0	18.0		

第4表 耳鼻咽喉科疾患罹患状況(中学校)

学 校	学年	疾患名										学 童 数
		鼻 炎	鼻 た け	慢 性 副 鼻 腔 炎	扁 桃 肥 大	扁 桃 炎	ア デ ノ イ ド	ア レ ル ギ ー 性 鼻 炎	咽 頭 炎	そ の 他	罹 患 者 数	
河 内	1						1				1	15
	2										0	19
	3										0	12
	計						1				1	46
	%						2.2				2.2	
	鳥 越	1	1					1		2	4	44
2		2							1	3	49	
3		1								1	40	
計		4					1		3	8	133	
%	3.0					0.8		2.3	6.1			
吉 野 谷	1	1									1	13
	2	1									1	17
	3				1			2			3	25
	計	2			1			2			5	55
%	3.6			1.8			3.6			9.0		
尾 口	1	1			1		1				3	14
	2										0	9
	3							1			1	22
	計	1			1			2			4	45
%												
白 峰	1							2			2	11
	2										0	22
	3							1			1	14
	計							3			3	47
%							6.4			6.4		
合 計	7	0	0	2	0	0	9	0	3	21	326	
計 %	2.1	0	0	0.6	0	0	2.8	0	0.9	6.4		

検した。

その判定は

各視野毎に多数の好酸球を認めるもの

#

毎視野に好酸球を認めるもの

+

数視野に好酸球を認めるもの

±

好酸球を認めないもの

-

第5表 鼻汁分泌液中の好酸球検索成績

小学校 N=63	+	54.0%	} 65.1%
	+	11.1	
	±	9.5	} 34.9%
	-	25.4	
中学校 N=15	+	26.7%	} 53.4%
	+	26.7	
	±	19.9	} 46.6%
	-	26.7	

とし、+, +は陽性, ±, -は陰性とした。

その成績は第5表に示す。すなわち小学校ではその陽性率65.1%, 中学校では53.4%で、昭和59年度のそれぞれ50.7%, 36.4%に比し、その比率はかなり上昇している。

さらに60年度は、アレルギーの抗原探究のためテストを行った。これは916名中陽性39名、6.3%であった。

第6表 アレルゲンテスト結果
(スクラッチテスト陽性者数)

アレルゲン	学校別						計	%
	河内 小・中	鳥越 小・中	吉野谷 小・中	尾口 小・中	白峰 小・中			
ハウスダスト	2 1	3 2	6 2		3 4	23	59.0	
スギ	1	2 3	1 2		1 2	12	30.8	
カモガヤ	1	1				2	5.1	
ヨモギ		1	1			2	5.1	
計	4 1	6 6	8 4	0 0	4 6	39		

*小=小学校、中=中学校

用いたアレルゲンは、ハウスダスト、スギ、カモガヤ、ヨモギで、陽性者中ハウスダスト23名(59.0%), スギ12名(30.8%), カモガヤ、ヨモギ各2名(5.1%)であった。

総 括

以上、私どもの石川県白峰地区の小学校・中学校耳鼻咽喉科検診の調査成績である。なおこの検診では鼻アレルギーに重点をおき、今年始めてアレルゲン・テストを行ってみた。

さてアレルギーは1906年、オーストリアの

ピルケが始めて提唱した言葉で、ピルケによれば、くアレルギーとは人体または動物体が、ある病気を経過したとき、また異種物質をもって処理されたとき、その人または動物が、その後これらの物質に対して反応能力の変化をきたすことゝをいう。その後この概念に対して種々改変されているが、その根本にピルケの理論の流れが現在まだ続いている。

この抗原抗体反応により、私どもは臨床面において気管支ぜんそく、枯草熱、偏頭痛、蕁麻疹、温疹、皮膚炎、クインケ浮腫、アレルギー性胃腸症、血清病などの診断に用いる。私ども耳鼻咽喉科領域では、鼻アレルギーが代表的なものであり、その患者は年々増加の傾向にある。この点に留意して、ここ数年来、へき地といわれる白峰地区の小中学校の検診においても重点的に観察してきたわけである。この地区は専門医の皆無の地帯であり、私どもはこの地の学校保健にいささかでも寄与したいのが念願であった。

鼻アレルギーはくしゃみ発作、水性鼻病、鼻閉を3主徴とする疾患で、吸入抗原が鼻粘膜に附着侵入することにより生ずる疾患である。ただ多人数の児童生徒の集団検診においては、抗原の検査は時間的制約もあり、鼻アレルギーの示標として用いられる鼻分泌物中の好酸球陽性によって推測するに止めざるをえなかった。今回60年度において実施しえ、スギの抗原陽性もみられ、今後の対策に裨益するところもあろう。ただスギ花粉飛散時期に合致せず、遺憾に思うが、機会をえて春期に実施したいとも考えている。

なお一言付け加えるが、59年度春秋2回にわたり鼻疾患のみにつき検診を行ない、鼻腔分泌液中の好酸球陽性率は、小学校においては、春は50.7%, 秋は36.2%, 中学校では、春は36.4%, 秋は31.3%で、それぞれ減少をみている。恐らく花粉の飛散時期に関連することも推測しうる。

今後もこの調査研究を実施し、診断とともに

に対策，治療に対する指示，さらに予防についても考究したいと考えている。

〈文 献〉

- 1) 豊田文一他：へき地学童の耳鼻咽喉科検診成績—13年間の推移—，富農医誌第14巻，昭和58年
- 2) 豊田文一他：学童における鼻アレルギーの調査研究，富農医誌第15巻，昭和59年